

「巻頭インタビュー」
心の中にあるものを
形にできる空間

養老孟司

大ベストセラー『バカの壁』など、多くの著作で知られる解剖学者の養老孟司さん。
10年ほど前に建てた神奈川県箱根の別荘は、養老さんが子ども頃からあまり込んでいる昆虫研究の拠点。楽しみを追求できる空間を持つ喜びを語っていた。

写真：神ノ川智早 取材：文ノ宇治有美子



よろう たけし
作家・解剖学者。1937年鎌倉市生まれ。1995年東京大学医学部教授を退官。2005年、箱根に別荘の「養老山荘」を建て昆虫研究に没頭する。著書に『バカの壁』（新潮社）、「庭は手入れをするもんだ 養老孟司の幸福論」（中央公論新社）など。

原っぱや林が広がるこの地の自然を感じながら、まるで秘密基地のような研究室で昆虫と向き合っているのは解剖学者の養老孟司さん。

10年ほど前、書庫と研究室を備えた念願の別荘「養老山荘」が、箱根・仙石原に完成した。思う存分、研究にいそしめる理想の空間を得たことで「知れば知るほど、奥が深くて時間が足りない」と、養老さんの昆虫熱は高まる一方だ。
1995年、60歳を待たずに東京大学医学部教授を退官した養老さんは、「世界は、こんなにも明るかったんだと改めて知り、感動しました（笑）」と当時の心境を振り返る。それから約18年。養老さんはこの別荘から世界各国に飛びたち昆虫の採集を行うなど、幼い頃からの趣味であった昆虫の研究に没頭している。

昆虫に魅せられた少年時代から探求心は少しも色あせない

——養老さんは、いつごろから昆虫に興味を持ち始めたのですか？
養老 小学生の頃から、山や川に

出かけては虫ばかり採っていました。はじめて昆虫の標本を作ったのは小学4年生の夏休みの自由研究。当時は何もない時代でしたから、外に転がっていた壊れた引き出しを箱代わりにして作ったのを覚えています。母親が薬局でもらってきてくれた古い薬瓶のコルクの蓋を、カミソリで薄く切つてのりで貼り付け、そこに虫を針で刺して、さすがに蓋のない標本でしたから今は残っていませんが、中学生の頃に作った標本は今でも保管しています。

——熱心に打ち込むことがあると、足りないものを自分で作るなどの工夫が生まれるのですね。

養老 今でも、ありとあらゆるものを使います。一番よく使うのは、牛乳瓶についているプラスチックの蓋。ガラスと違って割れないので扱いやすいんです。虫を洗うときにいいのが紅茶漉し、超音波洗浄が必要なときには眼鏡洗浄機、乾かすときはホットプレートも重宝します。意外と身近なものに役に立つので、100円均一ショップには随分お世話に



中学生の時に作った標本。今も大切に保管されている

生活を楽しむ住まい

Takeshi Yoro

養老さんのお気に入りの「外から見た研究室の窓」



なっているんですよ。

標本作りを通して有機的につながる世界を実感

——探求心もおのずと芽生えるものなのでしょうか。

養老 好きなことを追求すると、色々なことをやらなくてはならなくなります。例えば標本のラベル一つとつてもそう。小学生の時に本格的な標本を作りたい一心で、まだ習っていないローマ字でラベルを一生懸命書きました。虫の採集場所をローマ字で書き込むのが万国共通の約束事なのです。

何かに興味を持ち熱中し始めると、誰かに勉強をしないと言われるまでもなく、知識欲のままに学びを深めたいものではないでしょうか。

僕は答えの見つからないその状況を、脳にとげが刺さった状態と呼んでいます。脳にとげが刺さると非常に落ち着かない。でもずつと抱え、考え続けていると、ある日とげが抜けて分かることがあるのです。とげが抜ける快感を経験すると、探求することがやめられなくなります。

小学校高学年になると、友人らと連れ立って電車に乗り昆虫採集に出かけていた。現在も、養老さんが「虫屋」と呼ぶ研究熱心な虫友だちが集まってくる。

——仲間との出会いも、昆虫採集が与えてくれる楽しみですね。

養老 そうですね。でも、虫屋にもおのおの専門とする虫があるので、突き詰めると結局一緒に話せる人がいなくなってしまうんです。100年くらい前に僕と同じゾウムシを研究していた人がいて、時々その人が生きていたらいいなと思うことがありますね。「君が書いたこの本のこの箇所、間違っているじゃないか」「最近、こんな発見をしたんだよ」というような話をしてみたい。そんなことを夢想するのも楽しいものです。

——ところで、養老さんは昆虫を標本にする過程の中で、何に最もワクワクしますか？

養老 全てがががつながっている一連の作業だから、線を引けるわけではないんです。例えば、珍しい

虫を見つけたときにはもちろん興奮しますが、そこで終わりじゃない。家に帰ってきて丹念に顕微鏡をのぞいて気付いたことに、すぐく高揚することもあるわけですね。標本がたまってくと背景の共通点が見えてきて、世界が有機的につながっているのを実感したりもします。

自分が採ってきた虫には、採った日の天気や風、香りといった背景があるけれど、人からもらう標本はそうした背景から切り離された単なる虫だと感じるのも、そんなところにあるのかもしれない。だから虫を探ることか

ら始まる一連の作業を自分の手ですることが肝心なのでしょうね。そこが虫を研究する面白さでもあるんです。

5分で昆虫採集が始められる自然豊かな別荘

「養老山荘」には週に2、3度のペースで、自宅がある鎌倉から通う養老さん。「ここにいると、食事をすめるのが面倒になる」と話すほど、寝食を忘れて昆虫研究に没頭する。

——大学の退官後に取り組んでこられた昆虫研究は、すでに趣味の域を越えていますね。

養老 僕は、57歳の時に大学を退官しました。縛り付けられていた「世間」から解放されたその時、本当に世界が明るく感じられたんです。それからは自分が好きな昆虫の研究に打ち込んできました。それが生活の中心になっていくから、趣味というより生きることの一部ですね。

昆虫と向き合う時間が人生の喜びであり本分でもある

——箱根に別荘を建てられたのは、どのような経緯ですか？

養老 標本が増える一方で、虫を置くことができる部屋が欲しかったんです。それで女房があちこちの土地を探してくれて、たまたまここが見つかった。間取りやインテリアなどはほとんど女房任せですが、標本を並べるために、ヨーロッパの古い家にあるライブラリーのような部屋が欲しいという思いはありました。

——ここは、5分ほど歩けば原っぱがあります。春、ぼかぼかしていたりすると、居ても立ってもいられなくなつて虫を探しに出ることがあるんです(笑)。



「たとえ部屋の片隅でも、自分の世界に没頭できる場所があれば、好きなことを形にできる」

——別荘に一人で籠もっている方が、ご自宅よりも作業に集中できますか？

養老 そりゃ、もちろん。今は虫の研究は箱根でしかしません。自宅にいと、周りに家族だけでなく、猫(愛猫・まる君)までいて、「何か食べさせろ」と邪魔されますから作業を中断せざるを得なくなる。それに、ちよつと外の空気を吸おうと表に出ると、必ずまるが寝ているんです。すると、なんでこいつが寝ているのに、俺が働かなきゃいけないんだって、やる気がなくなつてしまふ(笑)。

——こうした楽しみのための空

間を持つことは、どのような効用があると思われませんか？

心の中にあるものを形にすることができるといふことでしょうか。どんなに好きなことでも、心で思っているだけでは形にならない。僕の場合はこの別荘がそのための空間ですが、たとえ部屋の片隅でも自分の世界に没頭できる場所があれば、好きなことを行動に移し、形にできるのだと思います。

僕が子どもの頃は自分の部屋なんて持てませんでした。標本置き場として作った棚が僕の楽しみのための空間でした。自分にとつての大切な場所なら、スペースの広さは問題にはなりません。

——養老さんの生活、人生において、昆虫研究はどのような位置づけなのでしょう？

養老 日本人は職務に忠実だから、家で過ごす時間も時間も仕事をしている時間の方が人生の中心になってしまふことが多いでしょう。でも本来は、家での個の自分が楽しめる時間こそが中心であるべきだと思ふ。

もちろん生きていくためには世間との関わりも必要です。時には嫌いなことと向き合う必要が出てきます。そんなとき、僕は嫌いなことを好きになるようにしていました。嫌いなという感情を持つこと自体、自分の中に引っ掛かりがあるわけですから、嫌いなことを分解して好きな面を見つけていくことができます。そうすると結構面白くなつてきたりするんですよ。

でも、僕は小学生の頃から仕事とは別に虫をずっと研究してきたから、人生全体からしたら虫を研究する家での暮らしこそが、本来の自分なのだろうなと。それだけで十分幸せなのだ、ここで過ごしているを改めて感じるんです。

「養老山荘」の外観。特徴的なデザインが目立つ



庭に置かれた昆虫を模した置物

Takeshi Yoro

生活を楽しむ住まい

(写真:田中昌)



昆虫標本がずらりと並ぶ養老山荘。あたくも昆虫の博物館だ



机には、昆虫標本を作るための様々な道具が置かれている。写真は昆虫を固定する「昆虫針」

(写真:編集部)



手を伸ばせば何でも手が届く研究室



養老さんが最も長い時間を過ごす研究室の机。好きな音楽を聴きながら、虫を洗ったり顕微鏡をのぞき込んだりする